

# 緑に包まれた計画都市

## 大韓民国 チャンウォン 昌原市

ソウル事務所所長補佐 野田 忍 (宮崎県派遣)

慶尚南道(キョンサンナムド)の道庁所在地として政治・文化の中心都市であり、世界屈指の工業都市・昌原市。大韓民国最初の計画都市は、低密度開発による住環境を重視した活気あるまちづくりを行っている。



### 市の概要

釜山から車で西に一時間、周囲を低い山で囲まれた丘陵地帯に緑豊かな都市が広がっている。韓国で最も生活しやすく、最近二〇年間で最も発展した都市といわれている昌原市である。

市街地に入ると一目でほかの都市との違いに気付く。市は開発当初より計画都市として低密度開発を維持しており、条例により建築物の建ぺい率・容積率を低く抑えているため、建物が密集しておらず、市中心部には高層建築物が見当たらない。市街地には四方八方に格子状の道路が走り、市の中心部を東西に伸びる幅五〇m、全長一二・五kmの昌原大路を軸に、北側は商業・教育・文化地域、

南側は産業公団及び港湾施設として区分されている。北

はさらに市の中心部に

位置する昌原広場を中心として、

道庁・市庁などの行政

機関及びホ



↑市の中心部にある中央広場周辺には行政機関が集まっている

テル・金融機関などの経済地区に区分されている。市の公園及び都心緑地面積は一五・四km<sup>2</sup>であり、九〇数カ所の公園と二三カ所の緑地が市全域に人工的に造成され、一人当たり公園・緑地面積率も全国一位の快適な生活環境となっている。

また、開発地域を一步外に出ると、そこには多くの自然が残し、工業都市という一面を持ちながらも農産物も盛んな都市である。市の北東部地域は洛東江(ナクトンガン)河口平野に当たり、肥沃な土に恵まれた慶尚南道の穀倉地帯となっており、温暖な気候は四季を通じて営農を可能にし、近郊に大消費地があることから園芸も発達している。また、全国最大規模の柿栽培団地があり、気候と土壌が栽培に適しているため糖度の高い柿が生産されており、海外にも輸出されるなど昌原の名物となっている。

岐阜県大垣市とは、一九八五年から始まった両市の青年団体の交流を契機に、フレンドリーシティ(大垣市では、形式や盟友にとらわれない市民主体の交流を進めている)として市民主導の活発な交流を行っている。

### 計画都市

市の発展は、一九七四年四月に韓国の重化学機械工業育成政策により産業基地開発促進地域に指定されたことからスタートした。開発はすべて国主導の下に行われたが、工業団地には教育機関、研究機関などが備

えられた併設都市も同時に開発され、工場地区、住宅地区、商業地区等が整然と区画され緑地帯も設けられるなど、最初から計画的な都市づくりが行われた。当初は隣接する馬山(マサン)工業団地の後背都市として造成された昌原であったが、一九七九年にオーストラリアの首都であるキャンベラを参考とした「昌原新都市設計」が確定され、一九八三年、釜山にあった道庁が昌原に移転すると、長期的な都市計画の下、それまでの単純な工業都市から産業と首都行政機能を備えた計画都市として発展していった。一九七二年には四万人程度だった市の人口は、一九八〇年の市昇格時には一二万人となり、一九九七年には五〇万人を突破した。二〇〇二年一二月末現在の人口は、五十一万七千七百人となっている。豊かな経済基盤を土台として、水準の高い市民福祉生活の実現のための都市計画条例を制定するなど、現在まで計画都市としての快適性を維持している。

## 韓国機械工業の中心都市

もともと機械工業団地の併設都市として開発された昌原の発展は、韓国における八〇年代の機械工業の発展と大きく関係している。重化学工業政策は、一九七〇年代、軽工業中心であった韓国産業を重化学工業中心へと方向転換を図るための国家戦略として実施された。このような機械工業の体系

的な育成は、八〇年代の機械工業の発展における基盤となり、さまざまな種類の工場を一つの団地に集中化することにより、機械工業相互間の関連効果を増大させ、高付加価値の精密機械工業とハイテク機械生産の下地形成につながり、二〇数年間で昌原を韓国の機械工業の中心地として成長させた。

現在昌原市には二五・三kmの昌原工業団地を中心として、機械、金属、電子、自動車生産などの工場が立ち並び、LG電子、大宇重工業、現代重工業、サムソン重工業などの韓国大手企業をはじめとして現在一二〇〇余りの企業が進出している。各企業は自動車機械部品などを海外に輸出しており、市では西南アジア、中東、アフリカに海外市場開発団を派遣するなど、積極的に海外市場開拓活動を展開している。また、市の位置する慶尚南道の南海岸地域には、馬山輸出自由貿易地域、北東アジアのハブ港として鎮海(チネ)市及び釜山広域市に造成中の新釜山港があり、韓国における物流・生産の重要地域の一つとなっている。

## 注南貯水池における環境保全

市北部にある注南貯水池は昌原の自然を最も満喫できるところで、三つの貯水池が水路で結ばれた一八〇万坪の敷地には広大な沼地と葦が自生している島があり、餌が

豊富なことから、国内最大の渡り鳥の渡来地となっている。毎年一月頃になると、天然記念物のハクチョウや、ナベヅルなど約二〇



↑冬を越す渡り鳥の楽園 注南貯水池

種、数万羽の野鳥が厳しい冬を越すために飛来し、白鳥の湖さながらの美しい光景を見せてくれる。市では、自然豊かな貯水池を保全するため、生物多様性管理契約事業を国内で初めてモデル的に導入した。この事業は生態環境が優秀な地域の農地を行政が借り入れ、特定作物を栽培することにより周辺生態環境を改善することを目的とし、渡り鳥などによる被害農作物に対しては損失を補填する制度である。

## レジャースポーツ

韓国重化学工業の基地である同市において、一九九九年から二〇〇三年まで、韓国初の国際自動車レース「F-3 KOREA SUPERPRIX」が開催された。市街地にコースが設定されており、十一月の開催期間中には国内外から多数の観光客が訪れ、世界



でも有数の自動車生産国である韓国と昌原を世界にアピールするこ  
ととなった。昌原での成功により、慶尚南道でのF-1選手権の開催も計画されている。

また、二〇

〇〇年にソウルに次いで二番目の競輪場である昌原競輪場が、昌原市と慶尚南道の出資により建設され、韓国初の全天候型ドーム競輪場として人気を集めるとともに、その収益は地域社会に還元され、地域発展の貴重な財源となっている。

## 独自の行政組織導入

韓国では、行政制度や都市計画において国主導の施策が行われることが多い。そのような中、昌原市では独自の施策を導入し、特徴的なまちづくりを行っている。

市の発展とともに増大した人口が五〇万を突破することが確実になった一九九七年、それまで市の下部組織として住民サービスを支えていた洞(注)事務所は、小規模の行政需要に対応するためのもので、機能上の限



↑市街地コースで開催されたF-3選手権

界と人材の不足が顕著となっていた。韓国では地方自治法により、人口五〇万以上の市は任意に一般区を置くことが認められており、市では住民サービスの停滞を打破するために区制導入についての検討がなされたが、結局、区役所設置に伴う多額の費用が発生すること、交通通信網の発達と情報化により住民の時間的・経済的な不便解消という区制導入の意味が薄れていることを理由に区制導入は見送られた。

市では区制に代わる独自の行政形態を検討し、既存の二四洞を一二洞に統廃合して洞事務所の規模を拡大した「大洞制」を導入することとした。大洞制においては、統合した洞事務所の一つを大洞事務所として使用し、統合により人員が増えた事務所に新たに一〇四の事務を委任することで区役所的な機能を持たせた。廃止された洞事務所には民願センターを設置し、区域の広域化に伴う各種証明書等発給サービスの低下を防ぎ、それ以外のスペースには図書館や集会場などを設置し住



↑緑の多い市街地は居住地区と工場地区に分けられている

民の地域活動の拠点として利用している。現在区制を導入している自治体の中には、区役所が機能していないため区制廃止の動きもある中、昌原の大洞制は自治体の実情に合った組織改編の例として評価されている。

(注) 韓国地方自治団体の行政下部単位。洞事務所では市の出先機関として、民願(住民が行政機関に行う申請・苦情・その他行政機関に特定の行為を要求すること)、福祉、文化などのサービスを提供している。

## 計画都市の未来

計画都市として順調に成長を遂げてきた昌原であるが、その成長は成熟段階に入っており、市では次なる発展のための変革に取り組んでいる。

市の発展を支えてきた機械工業においては、韓国全体として輸出製造業者の中国を中心とした海外移転の動きがある中、工業団地を知識集約型高付加価値産業である先端産業で再編し、機械産業の再生を図っている。

人口が五〇万人を超える現在、住居地域は飽和状態となり交通問題も深刻化するなど、市街地の開発が限界に近づいており、市街地の建築規制を緩和し低密度開発からの方針転換もやむを得ないとの声もある。しかし、市は、今日までの発展は市民へ快適な生活空間を提供してきたからこそ成し遂げられたものであるとして、生活優先の魅力あるまちづくりに取り組んでいる。